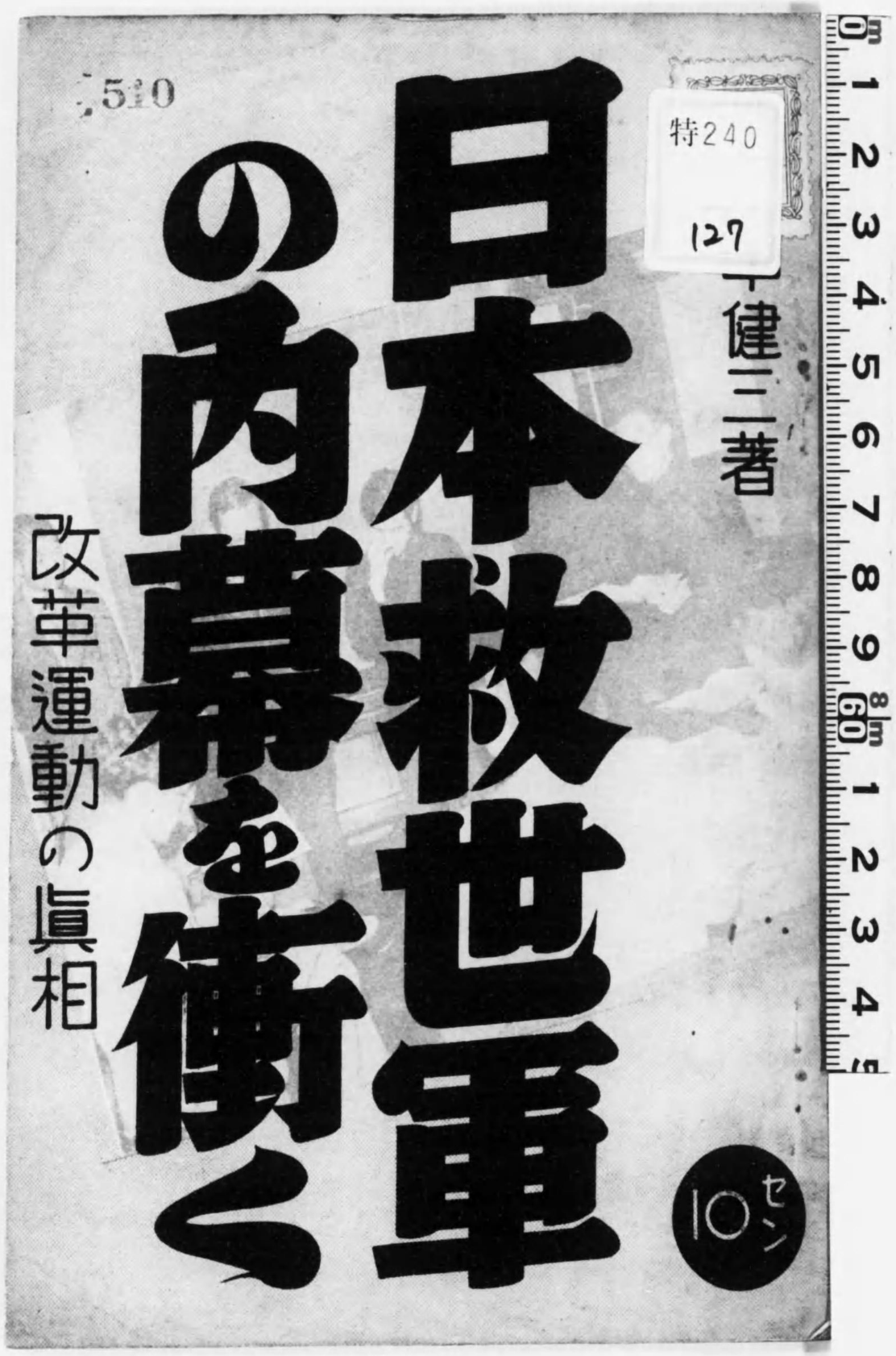


始

特240
127

目次

一、はしがき……（三）
二、怪文書『疲せ馬の願ひ』……（四）
三、社會鍋の正體……
四、克己週間、感謝祭の募金使途……
五、日本救世の實狀……（一四）
六、英人の奴隷的組織……（一六）
七、救世軍思想は不敬、日本の國體に反す……（一七）
八、公金横領者の續出……（二〇）

昭和廿二年六月廿三日 文部省圖書之印

九、世界の秘密、幹部の給料……（三二）
十、改革運動の眞相……（三三）
十一、山室中將の回答文と運動の切崩し……（三七）
十二、救世軍の內幕暴露さる……（三〇）

日本救世軍の內幕を衝く

田中健三

一、はしがき

日本救世軍は、鬱積した內面の醜惡を暴露されて、これも『ひとのみち』『大本』の類ひかと、世人を驚かせた。創立四十二年の輝ける歷史は、一朝にして醜惡史に置き換へられた。しかも、改革派の暴露戰術は、止む處を知らず、泥合戰はいつ果つるとも豫測を許さない。

キリスト敎の蔭にかくれて行はれて來た、救世軍の巧みなからくりと、インチキ振りには、たゞあきれるばかりである。

救世軍といへば、チンドン屋もどきのあの太鼓と、年末の社會鍋だけを聯想するのが、一般

の常識となつてゐる。その太鼓を叩いて集めた春秋二季の募金の九割が、彼等救世軍の宣傳費と、生活費に充てられ、年越しの餅を貧民にやるのだと思つてゐた社會鍋の金も、六千圓のうち三分の二の四千圓は、知らぬところに使はれてゐた。

しかも、辻々に立つてゐる救世軍士官は、相も變らず大衆に向つて『たゞ信ぜエヨオー』と歌つてゐる。虫のいゝ話だ。これ程大衆を馬鹿にした話が、世の中にあるだらうか。救世軍にあらずして救自軍である。

しからば、何故内から、そのインチキを暴かれねばならなかつたか、四十餘年間、彼等はいかに日本國民を僞瞞して來たか。僞りの傳導！　日本救世軍を裸にして、讀者の前にお目にかけやう。これが本稿の使命であり、責務と感ずる。

二、怪文書『痩せ馬の願ひ』

救世軍暴露に對する新聞の發表は、微溫に過ぎた。救世軍内の出鱈目とインチキはそんな生やさしいものではない。戰場（傳導）士官が死を賭して、三回までも團體行動によつて蹶起するには、深刻な理由があつた。

何故萬國本營から離れよと叫んでゐるのか、何故自主權を死者狂ひで獲得しなけりやならないのか、底の底、奥の奥には、思ひもよらぬ『虐めれられたる者』の叫びがある。

救世軍改革運動が、單なる民族自主の精神から起つたものだと考へるなら、大變な間違ひである。泥合戰の因つて起つた原因は何か、それは彼等改革派士官が、内部の者にだけ配布した悲痛な怪文書『痩せ馬の願ひ』が、最も雄辯に物語つてゐる。

◎怪文書『痩せ馬の願ひ』　（原文のまゝ）

『馬車馬の如く働け』とは、幹部が我々救世軍士官への命令であり、我々もまたその如く働くつもりで今迄やつて來た。軍律といふ目隱をされて、たゞヒタ走りに職分の道を四十年走りつゞけて來たのが、日本の救世軍である。途中で澤山の――千數百の中、四分の三の――馬共（彼等自分を指す）は過勞のために仆れた。

それでも、まだ魂の糧や生命の水の與へられた間は、馬も相當の元氣があつた。幹部といふ馭者も鞭は加へたにしても、馬共と勞苦を共にして荷物の重い時は手傳ひもしたし、第一馬共が馭者を尊信してゐた。それ故、強い鞭も奬勵とも感激ともなつて、振ひ立つたものだ。處がこの數年來は、ロク〳〵食物も與へられずに、（靈肉ともに）走らされる有樣。『そ

れ募金だ』、『ときのこゑだ』、『特別合戦だ　と息もつかさず走らされる。馭者共は横柄な顔をして馬の走り方が遅いと、その原因も調べずに、冷酷な鞭を振つて痩せ馬の尻をたゝく。

七十年も前に組立てた車（萬國本營の組織を指す）は、もう古くなつて自動車時代の現在では、時代遅れになつて故障續出、愛の油缺乏して摩擦も大きい。しかも、荷物は益々増すばかり、大きな本營と聯隊だけでも、百人に近い人間と、十萬圓にも及ぶ金とが積れてゐる。前後三四ケ月に亘る募金は、殊に目方のある荷物だ。そして、走つて行く救靈の通は、國民精神の勃興に益々山坂が多くなつて來た。見る影もなく痩せ衰へながらも、我慢に我慢して走つて來た順な馬共も、もう動けなくなつた。過重の荷物の整理をしてくれ、古い馬車の手入れも頼む、それに無慈悲な馭者も何とかしなくてはと去年（昭和十一年）の春は、遂に馭者の烈しい鞭に悲鳴をあげるに至つた。（所謂四月事件や救世軍二・一一事件などを指す）

苛酷の鞭に物を言ふのは、遠い昔の『バラムの驢馬』のみではない。現代の馬車馬も物をいふことがあるのである。今迄いかなる酷使にも、默つて従つて來た従順な馬共が、人間並に物を言ひ出したのに驚いた現代のバラム達は、馬共を欺いて、自主權も得た、荷も整理しよう、人間並の扱ひもしようと約束した。

性來従順な馬共は、つい馭者共の巧みな口車にのせられて靜かにし、その時の來るのを樂しみに、また一年走りつゞけた。が今日となつて馭者の言葉の嘘だと知つては、いかに愚かな馬車馬でも『馬鹿にされたものだ』位で、あきらめられるものではない。もう一歩も走れないと戰場（傳導）から逃げ出す馬の多いこと。中には、あまりに魂が痩せすぎて生氣を失ひ、馭者の加へる革の鞭にも、何の感じも持たず、生死の自覺さへもない無感覺な者さへある。何にしても、この痩せ切つた馬は戰ひの激しい戰場では役に立たない。何よりも先づ、これに天來の生命を與へる事が急務なわけだ。日毎の糧を充分に與へる必要が急務なわけだ。幹部や本營の者だけが、滿ち足れるパンを食べて、一般士官だからとて雲や霞を食つて生きて行けるものではない、生命の水も飲ませよ！　それと共に古い制度や馬車も改造し、重過ぎる荷物も整理し、又部下と社會を欺いて平氣でゐる信用のならぬ馭者共も、どうにかせねばならぬ筈だ。愛の油も差せ、宜しく總ての點に改革を斷行して、山路多き將來に備へねばならぬ。

これ痩せ馬の無理のない願ひである』

これが、彼等の僞はらざる告白であり、巧みな比論を用ひて『搾取しては安逸を貪る』本營士官の横暴への反擊の一矢であつた。もし本營が、四十年來踏襲して來た苛酷な封建制度を改め、戰場士官の待遇改善に釋然たる態度に出てゐたら、たとひ『日本救世軍に自主權を與へ』ずとも、騷動は極く内輪にに片づいたと思はれる。處が頑迷固陋な本營幹部が、『また例の手をはじめたナ、彈壓だ、從はなければ馘だ』とたかをくゝつて『痩せ馬』をなほも強く打ちはじめたゝめ、窮鼠却つて猫を嚙むの諭への通り、肝腎の母屋に火がついてしまつた。そして飛んだ醜體を、社會に暴け出してしまつたのである。

三、社會鍋の正體

本營よりダラ幹を追拂ふべし！　といふ聲は、遂に若き戰場士官から、澎湃として起つて來た。本營がまた例の手でと、時の書記長官、瀬川八十雄大佐補が、ブラックリストを取出して紅茶をすゝりながら『今度は誰と誰が主謀者かナ』など、呑氣に調べてゐる頃、早くも改革派士官から秘密文書『看板に僞りなきか』が、同志士官下士に配布されて行つた。勿論新聞紙上に發表される前の話である。この秘密文書は、後に改革派同盟と本營側が、全く收拾の道がつ

かなくなつた時、改革派から『全國民に訴ふ』とはじめて社會に公表された暴露聲明書の根幹をなした重要なものである。

その全文を次に掲げやう——

『社會鍋はこちらです。正月の餅を食べられない貧しい人々に、正月の餅を贈る、この運動に獻金を願ひます』と、慌しい年の暮に道行く人々の財布を開かせて、社會鍋に集めた金は東京だけで前回約八千圓、誰でもその金が、皆が皆でなければ、大部分は年越しの餅となつて、貧しい人々の口に入るのだと思つてをる。鍋の傍に立つてゐる救世軍人だつて、そう思つてゐる。處がその金の行衛を調べて見ると、まづ半額四千圓は、天引本營に取込んでしまふ。殘り四千圓で餅を搗いて、これを半額に廉賣するから二千圓の實上代金が入る。これも經常費として繰り上られながら、結局全額八千圓の中六千圓が正月の餅とはならないで、他の事に用ひられるわけ。『それでも看板には年越の餅その他に用ひらる』

とある。

だから少しも差支へないではないか。

看板に偽りはなしサと、幹部は濟ましたものかも知れない。が『その他』が全額の四分の三とは、内輪の者でもあまり知らないことで、『うまくやつた』と、平氣で濟ましてをる本營幹部の、心臓の強いのには感心する。五百萬市民を手玉に取る大膽さには、石川五右衛門も及ぶまい。でも市民も官憲も、いつまでも絶對に信用して、少しも疑はないでをるだらうか。現に昨年末大阪では『社會鍋の金は全部年末に貧民慰問に用ひないなら許可せぬ』と、當局が容易に許可しなかつたといふではないか。

幹部程にこの點大膽でない我々は、社會より非難されぬ先に、止めてくれゝばよいがと氣がとがめてならない。云々。

集める救世軍士官が、氣が引けるといふのだから、よく〳〵の事である。しかも本營は恒例『社會鍋』募金といつて、堂々白晝このインチキをやつてのけてゐたのである。そんな事とは夢にも知らない市民達は、師走の寒空に『貧しき人々のために』としつこくつき纏はれると、たゞ一途に彼等の云ふ事を信じて、鍋の中へ金を投げ込んでゐたのである。どこまでも甘く出來てゐたのが、我々市民だつたと氣づいては『もう金輪際社會鍋なんぞに金を入れるものか』

と憤慨せずにゐられようか。『老獪な本營の豚共』の口車に、もう誰も乘らなくなるであらうことは明瞭である。

一體救世軍士官は、いづれも過去になにかしら罪惡（法律的の場合もある、精神的の場合もあらう）を犯したか、心の迷ひがあつて、これを神の前に懺悔し、そして救世のために働かうとして傳導に入つて來たのである。して見れば、こんなインチキな喜捨を求めるのが心苦しいのは、當然過ぎる事だ。しかも、かういふからくりだらけである事を、段々知るにつけ良心の苛責から、心ある士官は耐へられなくなつて、幾度か過去に於いて本營に抗議、規則の改廢を歎願したのである。

だが、本營は『これ即ち救世軍の軍律である。士官はたゞ本營の命に從ふ事を以て本分とすべし』と、押へつけた。うるさくなると、被免一本槍で進んで來た。このため、救世軍は過去に於いて、どれだけ有爲な士官を失つてゐることか。氣骨ある士官は、自らこんな腐敗した救世軍内に止る事を潔しとせず、去つて行つた。

しかもどうだ、これ程非良心的社會鍋の問題に對し、彼等が父と仰ぐ老司令官山室軍平中將は、そのインチキを暴露され、新聞記者團から質問を受けた時、何と答へたか、『社會鍋の傍

には年越の餅を廉賣、その他社會事業に用ひると書いてある。餅にいくら使つて、その他にいくら使ふとは決して書いてない。即ち救世軍にインチキなき所以である』と嘯いた。

これには、さすがの戰場士官も呆然としてしまつた。日本救世軍の育ての親として、百歩も千歩も讓つて出來るだけ老中將に傷がつかぬやうと、遠慮して來た改革派は『眞の救世軍』たらしめるためには、中將もまた血祭りにあげざるを得ないと決意、遂に三長官引責辭職勸告となつたのであつた。そして、世界でも僅か四回しか開かれた事のない、無論日本では最初の軍法會議召集とまでなつたのである。

四、克己週間、感謝祭の募金使途

恐らく、今年末の社會鍋募金に對しては、警視廳もそう易々と許可はしないであらう。尠くとも、鍋の側にかける趣意書に『その他』の明細を認めさせる事にならうが、それよりも、もつとひどいのが、春秋二季に大々的に行ふ募金の使途である。

救世軍は、春に克己週間、秋に感謝祭の名によつて、全國的に大がかりの募金をやる。そして、それが各小隊宛に大體『お前の方はこれ位集めろ』と、上から目安をつけて寄越す。だか

ら、小隊では無理をしても、相當額の募金に成功しやうと、小隊長以下副官、下士、兵士が死物狂ひで、手分けして集めに廻る。勿論彼等は『社會事業のために御寄附下さい』と言つて、泣きつくのが常套手段だ。それがどうであらう。

救世軍第三十九年度、決算報告書を見れば、かくして集めた。

感謝祭獻金收入、九二七九九・七三（圓單位）のうち、社會事業資金に繰入られてゐるのはたつた六千二百圓である。

克己週間獻金收入、九一〇二八・一五（圓單位）のうち、社會事業に振當てられたのは、これも僅かに五千圓である。また昭和十年度春秋二季に行はれた募金總額十九萬四千圓强のうち、社會事業には僅々一萬三千圓を用ひてゐるのみで、こゝでも『その他』のからくりが、ちやんと物をいつてゐる。何に使はれてゐるか、『その他』とは本營、士官學校及び戰場等に繰入れられた費用を云ふのである。つまり、救世軍の宣傳費に、市民は一生懸命寄附してゐるやうなわけになる。社會事業のためにといつて集めた金の九割までが、自分達の生活費や傳導費（つまり宣傳費）に費はれてゐたのである。

良心的な人間には、ちよつと出來ない技だ。安樂椅子に凭れてゐる本營幹部は、それでもよ

いとして實際募金に當つてゐる士官は、恥しくてやれないといふのは當然の事であらう。

それらの問題に對しては、改革派から出された『日本救世軍の實狀を述ぶ』（社會には未發表）が最もよく傳へてゐるので、改革運動の眞相を掴む近道として、多少の重複は覺悟の上で敢へて次にそれを掲げやう。

五、日本救世軍の實狀

救世軍が、基督教を基としてをる點では、他の教會と變りませんが、それと共に救世軍獨特の規則がありまして、それは『全世界の救世軍は必ず英人を以て首腦者として實權を握らしめ、英國にある萬國本營がこれを統率支配し、英人の大將を戴いてその指揮命令には、絶體に服從する』との鐵則です。從つて、從來とても日本の國情に合はぬものが多々ありました。まして現在の日本は、過去の日本とは違ひ、滿洲事變を契機として、英國追隨の態度を改め、自主的態度を明にし、東洋の盟主を以て任じ、更に凋落期にある歐米文化に代つて世界に新生命を與へ、次の時代の指導者たるをその使命となすとする、この國民的精神の强烈なる現代に於ては、かゝる救世軍七十年來の大方針たる『全世界の人々を宗教的に訓練して、英人の支配下

に服せしめる』といふ、英國の殖民政策と軌を一にする方針は、我國民には到底受入れられる筈がないのであります。

そして、これはまた基督教の本義とも相反し、我國家の持つ使命とも相容れないものであります。されば、從來とても多くの救世軍人が、山室中將はじめ日本人幹部に、日本救世軍はかゝる羈絆より脱して、自由のものとなすやう、度々進言したのであります。けれども、日本監督のため萬國本營より派遣されてをる英人士官と、終世萬國本營に絶體服從を誓つて、現在の立場を與へられてをる日本人幹部（註・司令官山室軍平中將、現財務書記官兼司令官附で次期司令官に擬せられてゐる瀬川八十雄大佐補並に書記長官植村益藏大佐補を指す）は、この進言を受け入れる筈もなく、さればかゝる思想を抱く士官を彈壓し、片端から罷免馘首したのであります。しかし、英國第一主義は『平等、自由、正義』等の聖書の教へにもとる故、純眞な宗教生活をなさんとするものに取つては、甚だ妨げとなり、その結果多數の人々は、救世軍に永く止ゞらないのであります。我々はかゝる宗教的信念の上からも、また日本人たる體面の上からも、いかに幹部が彈壓しても、かゝる不都合千萬なる主義方針には、どうしてもそのまゝ默從する事が出來ず、その獨立を叫ばざるを得ないのであります。特に近年の國民思想の勃興と

共に、この傾向は大多數士官軍人の間に彌蔓し、最近はその犧牲となつて幹部のため仆される士官は、常に絶えない有樣であります。

六、英人　奴隷的組織

この運動は、獨立でありまして、孤立ではありません。どこまでも、キリスト敎の精神に基いて、英國初め各國と對等の立場にたち、協力して世界人類に奉仕しやうことを願ふてをるものであります。たゞ英國の支配下から脫して、日本のことは日本が、自由にその國狀人情に適した働きを爲して行くことを、主眼とするものであります。如何に幹部が辯解しても、現在は英人の奴隷にも等しい狀態であり、何一つ英人の許可なくしては、なされないのです。もとより二百數十萬圓の日本救世軍の財產も主權も、英人の手中にあるわけです。

この英國への從屬主義に對して、山室中將は『今は萬國本營が英國にあり、英人の支配下にあるが、これは米國にまた日本に移る日が來ないとは云へぬ。從つて萬國本營に從ふことは必ずしも英人に從ふことにはならぬ』と云はれたが、これは恰も黃河の水の澄む時の來ない筈はないと云ふのと同樣、只一片の理窟であり、あまりにも僞瞞的な辯解と云はねばならぬ。

昨春、この自主權獲得運動が、表面化した際、もしこの眞相が社會に發表されて、英國の絶對支配權と幹部の隷屬的態度が暴露されゝば、國民大衆の反感を買ひ、寄附金募集にも大影響を及ぼす事を怖れた本營は、狼狽の極に達し、急據英人司令官（ロルフ聯立司令官）を轉任せしめ『自主權は確立せり、喜べ日本の救世軍は今こそ日本人の手に歸せり』と內部の者にも、社會にも發表しました。しかるに、山室中將の聲明を信じて、改革運動の中止さるゝや、直ちに英人士官（註、つい先頃歸國した總務書記官デビッドソン中將を指す）をして、これに代らしめ、名目上は日本人なれども、實權は英人が握り、舊態依然その聲明は、全く一片の反古となつて現在に至つてをるのであります。

今迄山室中將に全幅の信賴を置いてゐた多數の士官軍人は、このあまりの情けない狀態に全く失望しかく日本國民を欺き部下の信任を裏切つてまで、英國に服從せねばならぬ理由がどこにあるかを、今更の如く驚いたのであります。

七、救世軍思想は不敬、日本の國體に反す

昨秋自主權運動の一士官が、馘首さるゝために本營に呼びつけられた際、植村大佐補（當時

戰場書記官）は『日本司令官の英人によりて任命さるゝことの絶體的なることは○○○○○○○○○○○もの』との不敬極る言葉を發表しました。英人の任命せる司令官は、○○○○○○權威を持つといふのでありませうか。しかも、その取消を他の士官から忠告されましたが、信じ切てをるものか、遂に取り消しませんでした。

山室中將が『滿洲事變はエチオピア問題と共に弱肉强食の實に無茶な話だ』と云ふのを聽いて、日本の國狀に對する認識不足を感じたものであります。滿洲事變勃發當時、平和運動に名をかりて、日本の出兵阻止の大運動を起せとの秘密命令が、幹部に對して萬國本營から來たとのことについて、だいぶ問題になりましたが、北支に於ける英國の權益保護のために、宗教團體を利用せんとしたものは誰か。これに對し日本人幹部は如何に策動したか。この賣國的行爲に對し、我らは眞相を知りたいものである。

瀨川大佐補は『英人の統卒保護の下にあるならば生涯ルンペンの親方にも甘んじやう』と云つて、あまりの英人依存の心底に、心ある人々をして憤慨せしめたものであります。日本の救世軍を指導する三長官の、これら不用意なる言葉のうちに、我々はその抱く思想を伺ひ得る氣がします。そして少なくとも、現在日本人の持つ理想信念とは可なりの隔りがあるやうな氣が

致します。

救世軍中に於ては、英人は神に次いで、尊敬と權威を持つものであります。日本に四百數十名の士官があり、長年救世軍にあつて、その人物識見の優れたる者も多くあります。しかし、四百五十人が束になつて掛つても、たゞ一人の英人には敵すべくもないのであります。有色人種の四百五十は、白人の一にも及ばぬといふのが、救世軍の建前であります。『救世軍は人種國籍によりて人に上下の差別を設けぬ』と創立者は云ふたこともありますが、兎に角云ふことと實際とは合はぬものです。殊に救世軍に於いては！

先頃一人の若い士官が罷免されました。彼は眞實熱心な者で數年間の士官の激しい働きのために健康を害して病院生活をなし、未だ全く癒へない狀態であります。處が本營から只一本の手紙を以て、士官を辭めさせられました。もとより一錢の金も與へず、表面の理由は病氣だからといふことになつてをりますが、實は彼が獨立運動に共鳴してをると、幹部に睨れたからであります。英國隷屬主義をモットーとして、これに反する凡ゆる思想を殲滅せんとする團體が、わが日本の中に嚴然として存在するとは、奇怪至極とせねばなりません。しかも、それが民衆の精神指導の立場にある宗教團體であるとすれば、民衆に及ぼす影響も考慮すべきではあ

りませんか。

八、公金横領者の續出

救世軍と云へば、寄附とすぐ思ふ程までに、救世軍は常に全國津々浦々を寄附金募集をしてをります。文部省は救世軍の社會事業を維持するためとの理由で許可してをり、世間もまたそのために寄附するのであります。

救世軍發行の募金趣意書にも、社會事業を大部分述べてあります。しかるに、かくして集められた十六七萬圓の僅か一割にも足らぬものが、社會事業に用ひられ、その九割强は本營費その他に用ひられてをるのが實狀です。『傳導と社會事業とは一體なり』とは、幹部の云ふ處でありますが、我々宗教生活をしてをる者には、これは社會を欺くものとして、良心に恥じざるを得ないのであります。もし傳導資金として、一般からの募金を文部省が許すとすれば、他の教會にも許さるゝ筈ですし、若し社會事業のために許可されてゐるとすれば、救世軍が社會事業を經營するは、金集めの看板であるといはれても仕方がない氣がします。この點甚だ曖昧で、若し當局の嚴正なる査問がありますれば、幹部は良心的に返答に苦しまざるを得ないわけ

であります。

多數國民より、貧者の一燈として托された大切な金が、本營財務官によつて取扱はれてゐる間に、度々二千圓、三千圓と横領消費されてをることを耳にします。このために免職された外人、日本人は幾人あるか知れません。最近には一萬圓も横領した本營士官ありとして、彼は罷免されました。

救世軍に寄附した金は、間違ひなく正しく有効に用ひられると、信用されて寄附された金が、本營の金庫の中から姿を消すとしたら、その監督たる幹部は、何らかの形式にて、責任を負ふのが社會に對する義務ではないかと思ひます。かゝることの發生する毎に、直接人々に接して募金した我々士官兵士は、責任を感じて幹部からその實情を知らせて貰ひたいと思ひますが、かつて一度も發表されたことがありません。

何が故に、幹部は事情を知りながら、かゝる不正を暗から暗に葬つておるのか、社會に知れると金集めに差支へるからとでも思つてのことなら、宗教團體としてはあまりに不明朗なことではないか、若し當局の取調べでもあれば、困ることであらうと、本營のために心配してをるものであります。

九、世界の秘密、幹部の給料

世に何が嚴秘にされてをるといふて、救世軍參謀士官の給料位、全世界に於いて、秘密にされてをるものはないのです。これは救世軍士官は、少額の收入にて犧牲的に働きをしてゐる者と、社會に吹聽してをる手前、實は一般社會に比べて高給を取つてをる參謀士官でありますから、社會の非難を考慮して、絶對に秘密にしてをるわけであります。しかし、大臣から小使さんまで世にその給料をかつて一度も發表したことのないものがどこにありませうか。しかも、その金は『人助けのために』と云ふて、公然集めた全であるに於いておやであります。

この秘密が嚴重なもので、我々士官（中佐以下）はもとより、直接本營財務部に居て金錢出納に携つてをる士官にも、解らないのであります。それは財務長官たる英人から、月末に來月分として五千圓なり、六千圓なり一纏めにして幹部に渡され、これを幾人かの參謀士官が、秘密に分けるといふ仕組になつてをるからであります。

本營の經費が多きに過ぎる故、昨秋の募金許可に際して、文部省よりその節減を命ぜられました。依つて幹部は苦心考究の結果、今迄全國士官に秘密にして、自分達だけで勝手に取つてゐた本營士官の辨當代を廢することに致しました。金額は五千圓、四五十人の本營在勤士官は小隊士官が骨を削り、肉を枯らして『貧しき人々のために』と云つて集めた金を、實際勤勞に携つた人々には相談なしに、長年の間それこそ甘い汁を吸つてゐたと云ふわけであります。

現在日本の救世軍は、全體としては財政的にも、外國の援助なくしても、自給の域に達してをります。若し幹部が獨立をなす決心さへありますれば、直ちに獨立出來て、少しの支障を來さぬのみか、かくすることによつてこそ、眞に日本に適合した働きが爲され、益々國家民家のために役立つものとなることが出來るのであります。

救世軍の實狀と、我らの主張を述べて大方の批判を乞ふものであります』

十、改革運動の眞相

メスを入れゝば、止めどなき矛盾撞着ばかり、しかも、本營の態度は何等改めやうとする誠意がない。昨年の四月事件以來、同志と緊密な連絡を取つて機を伺つてゐた改革派は、五月に入ると活潑な活動に入り、北は樺太、北海道、南は九州博多と各地から蹶起士官が上京して來た。

今度の運動の特に注目される點は、戰場と關係が薄いといふよりは、むしろ反對の立場に從來ある如く見られた、社會事業部の一部が改革の指導的位置に立つた事である。

士官達は續々淺草北三筋町の救世軍病院に集つて來た。一年有餘の期間中に彼等は相當の戰備を整へてゐたので、今度こそはといふ意氣で指導者の眉宇に濃く漂つてゐた。

五月六日救世軍改革同盟が結成された。直ちに、代表者救世軍病院 宇都宮又雄、村井學生寮主任、塚本弘西大尉等は神田の日本本營に山室中將を訪問して、改革の上申書を提出した。その內容は、

『日本に於ける救世軍が、今や全面的に行詰りを來したるは、誠に寒心の至りであります。宗教團體たるべき救世軍の靈的生命が枯渇し、今や全く事業團體に墮し去らんとして居ります。その原因を尋ねるに、(A)聖靈の自由なる御働きを閉塞する專政制度、(B)日本の國情と相容れざる英國直流の諸軍律をその儘採用したる所にありと信じます。(C)更に在英萬國本營の支配下に置かるゝ事は、東洋の盟主を以て任ずる我が民族意識の堪へざる所であります。このまに過しますならば、救世軍は形骸のみを留めて自滅する外ないと信じ、默視するに忍びず、いかにして靈的生命の躍動せる神の軍體たらしめる爲め左記の如く諸制度の改廢を斷行し、併

せて全軍悔改の爲めに、全國大會の開催を懇願する次第であります。

(一) 日本救世軍の自主權を確立する事。

(二) 司令官は選擧に依りて定めかつ年期制とする事。

(三) 軍事會議を設置し諮問、研究及び決議機關とする事。

(四) 士官の罷免は軍事會議の同意を要する事。

(五) 戰場の財政方針を確立し募金は良心的に行ふ事。

(六) 本營を縮少し事務の簡易化を詳る事。

(七) 聯隊は中隊制度とし中隊長は部內士官の互選とする事。

これに對し、山室中將は、上申內容をもう少し具體的なものとし、書類を以て提出して戴きたいと答へたので、改革派代表は越えて八日更に本營を訪れて、覺書を提出した。その內容は

(一) 日本軍國內に於ける人事、行政、財政等の一切は萬國本營の指揮命令を受ける事なく日本司令官これを行ふ。

(一) 日本司令官は日本救世軍を代表す。

(一) 日本司令官は軍事會議にて選出し大將はこれを承認するものとす。

（一）日本司令官の任期は四ケ年とす。

（二）軍事會議は豫算、決算を協算し、司令官の諮問に答へ、また司令官に建議する事を得。

（一）軍事會議は左の議員を以て構成す。

（イ）司令官、書記長官、戰場部長、財務部長、社會部長、士官學校長、その他本營士官二名。

（ロ）中隊長及び中隊内小隊長一名互選。

（ハ）各中隊内兵籍調査會下士官一名互選。

（ニ）社會事業部主任士官四名互選。

司令官山室中將は、十五日本營側の回答をする旨回答して『神の國』の爭動は、それでも宗教家らしい祈りのうちに、極めて靜かに表面は過ぎて行つた。しかし病院の同盟本部には、四十餘名の士官が籠城を續け、本營側を痛苦せしめた。

折も折、今春悅子夫人を亡ひ、自らも健康勝れざる病める老司令官山室中將の慰問使節として、萬國本營ブース大將から派遣された、アメリカ南部司令官バブマイヤー少將が、改革運動

でどつた返してゐる日本へやつて來た。十二日朝エンプレス・オブ・ロンヤ號で來朝、直ちに上京山王ホテルに宿をとつたが、これがまた萬國本營の眉息を伺ふに寧日ない本營士官を痛く狼敗させたものだ。

愼重を期した山室中將は籠城本部の足並みにも充分探りを入れ、切崩しをやる一方萬國本營とも電報で絶えず打合せた結果、回答期日を二日間延期して、十七日正面衝突覺悟の回答書を發表した。

十一、山室中將の回答文と運動の切崩し

山室司令官の回答文は『親愛なる戰友諸君』といふ書出しで、極めて詳細丁寧を極めたものであつたが、改革派の主眼とする自主權問題は『既得せり』と逃げを打ち、全面的にこれを否定するものであつたから、改革派はいきり立つた。餘り長文のため一部分を抜き書して見れば、

『宇都宮大尉その他七十四名の連名を以て、御差出になつた上申書に對し、私共の立場を御回答申上げたい。書中記された七ケ條については第一（以下上申書の項參照の事）「日本救世軍の

自主權を確立すること」が全篇の主眼であると承知して居ります。（略）救世軍はその國々にて、自立自存をなすのみならず、進んでその必要ある國々を助け、共に世界に貢献せん事を目的とする團體であります。救世軍はあくまで民族的であると共にまた國際的の運動で』現狀のまゝで何等差支へないと否定。

第二は『大將によつて、司令官は任命される規定で、目下世界各國共通する規定の一つであるから、日本だけが、これを改めることは困難であります』

第三は『現存する聯隊會議を善用し本營内にある各種會議を活用、諸君の希望に添ふやう努力する』

第四は『現存の規定に從ひ必要の時は「軍法會議」を設けて遺憾なさを期する』

第五は『全く同感』

第六は實行中。

第七は否定。

といふ事であつた。處が改革派代表のちよつとした失言から、運動に一大頓挫を來した。山室中將と會見の際、本營に詰めかけた新聞記者團に代表の一人が『もし本營側に誠意がなけれ

ば、自分達は救世軍の内面を暴くつもりである』と不用意にも漏した事が、同日の夕刊にでか〳〵と出たゝめ、籠城中比較的穩健派の士官が『それは救世軍自體を傷つけるものだ、自分達に相談もなく、かゝる事を發表するとは何事だ』と内輪もめをはじめた。時よ得たりと本營側は『籠城士官に告ぐ』と例の二・二六事件に於ける歸順勸告文もどきの切崩し文を、改革派全士官に配つた。『君達の氣持はよくわかる、だがこれ以上運動を續ける事は軍そのものゝ母體を傷つける事になる。この際は默つて原隊へ歸れ、旅費のない者は本營で支拂つてやる。汽車の都合で歸へれぬ者は、宿泊代も本營で拂つてやるから申出て來い』といふ意味のものであつたゝめ、大勢如何にせん。改革同盟は何物も闘ひとる事なく、面目丸潰れのうち、同十七日夜悲壯な祈りのうちに籠城を解かれてしまつた。

しかし、根強い改革運動がこんな事で鎭壓出來る筈はない。強硬派は即日運動繼續を表明した。そして十九日山室中將を訪問、『改革の底に漲る精神は、これ愛軍の精神に對する忠誠に外ならず、我等曩に聖靈の御導きに依り七ケ條の上申書を足下に奉呈せり。然るに、その回答を見るに、我等の所期する所とは遙かに隔り、その誠意の那邊にあるやを知る事能はず。然れども今神の御旨なりと信ずる故に、同盟を解除し、各々任地に歸隊す。沈默は屈服にあらず、

我らの要望する改革は必ずや達成せざるべからず、我らは自今司令官の誠意ある實行を期待すると共に、我ら自ら改革の達成の爲めに、勇奮努力すべき事を聲明す。神の御旨の必ず成るべきを信じて』の一文を宇都宮、塚本兩大尉外百九名の名によつて、手交したのである。

十二、救世軍の內幕暴露さる

改革派士官が、原隊へ歸り、ジャーナリズムのセンスが他へ外れた頃を見計つた本營では、同月二十六日突如運動の指導者宇都宮、塚本兩大尉を呼びつけて、(イ)戰場士官の上京を促したること、(ロ)任地を離れて運動に從事せしめたこと、(ハ)救世軍病院を運動本部に使用せること、(ニ)最後の挨拶によれば今後もかゝる事件の繰返さるゝものと見なければならぬ、軍隊の秩序を保つ上から、(イ)自から士官を罷めるか、(ロ)罷めなければ罷免する、(ハ)申分あらば軍法會議を要求することを得る。右三つの一つを撰び二十九日までに回答せよと申渡した。その時の會話が振つてゐる。

塚本大尉『私は首が飛ぶ事位覺悟ですが、私共の首を切つて、一體あなたは如何なる責任を負ひますか』

山室中將『責任は取るが、何時とか何をするかは言明出來ない』

塚本『戰場書記官は恥を知つてゐますか、謹愼する處でなく書記長官に榮轉してゐるではないか。司令官の責任もその類ひではないか。日本人の精神は恥を知り、責任を重んずるにある。然るに長い間英人の下にあり、日本獨特の責任感を忘れたのではないか。二・二六事件の將官達の心事があなたにわかりますか。士官は召命に立つて居ります。私は召命の幻が消えるまではやめません』

かくて救世軍の悲劇、第三革命は遂に勃發した。最早全く本營に誠意なしと覺つた改革派はあらゆる情實を飛越え『改革の敵』として、三長官の辭職を逆に勸告。牛込市ヶ谷本村町の村井學生療を本部として、食ふか食はれるかの戰ひの火蓋を切つたのである。

本營に對しては、(一)辭職せず、(一)罷免の場合は軍法會議を要求す、(一)事件の責任を負ふ三長官の辭職を勸告す、の回答文を突つけると共に、社會に對しはじめて救世軍內面暴露の聲明書を發表、アッと言はせたのである。

泥合戰の波及するところは、各派キリスト教會今後の傳導上、極めて重大なる影響ありとして、山室中將の恩師で、天同大社長小崎弘造氏等宗教界の元老は、圓滿解決のため奔走した

が、本營側は改革運動の終息を眼目に、これも倒すか倒れるかの決意のもとに、宗教界に於ては寒心すべき事と豪々たる非難の聲の中に、日本救世軍としては、最初の軍法會議を開く段取となつた。

しかし神の國の裁判が、どう審判されやうと救世軍それ自體はこの運動で致命的な痛手を被つた。と同時に現在の如きインチキとからくりで、社會人を僞瞞し、血みどろの傳導をつゞける戰場士官を、たゞ命令の一言で生活苦に泣かしむる限り、第四、第五の改革運動は必然近き將來に起るであらうし、日本救世軍はその度毎に外は社會の信用を失ひ、內は氣骨ある有爲の青年士官を失つて、自ら墓穴へ驀進する結果を招來するであらう。

改革派は救世軍を脫退して獨立を聲明した。

（終）

◇編輯だより◇

◇神の使徒、平和の傳導者、愛の讃美者、人類の救濟者、を以て任ずる救世軍の花園も、ひつきよう、人間の住む所であつた。突如、少壯將校より首腦部に對して、强硬なる改革の意見が投げられた。本書は其の改革運動の眞相と、救世軍の內幕を書いて、一冊としたものであります。世界に自由主義の思想を普及化することにつとめてゐる救世軍日本では自由主義排擊が叫ばれてゐる今日、本書は何等かの參考になることゝ信じます。

◇本社のパンフレットは毎月三冊以上發行致しますが、何れも其の方面の權威あるエキスパートによつて書下された內容充實したものばかりであります。街頭に氾濫してゐる、無名筆者が一夜で書いたインチキなパンフットと同一視されないやうに御願ひします。本社發行のものは、表紙の上部に必ず『今日の問題社版』と明記してあります。御買求の際御注意下さい。

◇本社パンフレットは全國の驛賣店、各書店で發賣して居りますが、直接購讀御希望の方は、ハガキで本社へ御申込になれば、新刊の都度御送りします。

◇本社機關紙は毎月一回何人にも無代にて進呈しますから、ハガキで本社へ御申込下さい。

日本救世軍の內幕を衝く（No. 101）

昭和十二年六月十四日印刷
昭和十二年六月十八日發行

定價十錢

著者　田中健三
發行者　伊藤隆文　東京市芝區田村町四丁目十八番地
印刷所　三陽堂青野印刷所　東京市芝區田村町四丁目二番地

（不許複製轉載）

發行所　今日の問題社
東京市芝區田村町四丁目十八番地
電話芝（43）三〇〇七番
振替東京五九七四八番

東京鐵道局公認　鐵道保養會（鐵道各驛ホームスタンド一手販賣）
鐵道弘濟會・鐵道授產會
森田書房・富田報英堂
東京堂・大阪屋號（滿鮮）
新正堂（京阪神一手販）・川瀨書店（名古屋）
菊竹金文堂・大坪惇信堂

大取次

◇今日の問題パンフレット◇

陸軍パンフレット 經濟戰略・思想戰略 價一〇 送三
補公研究會編 密寶大楠公の遺訓書 價一〇 送三
高橋是清著 處世一家言 價一〇 送三
永松淺造著 豐太閤の處世術 價一〇 送三
松下芳男著 林銑十郎と眞崎甚三郎 價一〇 送三
菅原節雄著 陸軍の智腦九人男 價一〇 送三
金子堅太郎著 日本憲法の精神 價一〇 送三
松下芳男著 川島義之と渡邊錠太郎 價一〇 送三
小林順一郎著 軍部と國體明徵問題 價一〇 送三
林知治譯 ジヤクソン式强體健康法 價一〇 送三
松下芳男著 荒木貞夫と阿部信行 價一〇 送三
長谷川了著 裏から見た歐洲の外交戰 價一〇 送三
小泉二十著 外交陣をめぐる軍部と外務省 價一〇 送三
久原房之助著 國體宣揚と重臣ブロック 價一〇 送三
經濟問題研究會編 サラリーマンは何處へ行く？ 價一〇 送三
三島康夫著 日支衝突必然論 價一〇 送三

石山賢吉著 金持に學ぶ 價一〇 送三
高橋是清著 半生の體驗 特二〇 送三
藤原銀次郎著 產業日本の進路 價一〇 送三
牧野元次郎著 人生金儲け修業 價一〇 送三
長谷川了著 急迫せる日ソ關係 價一〇 送三
三島康夫著 日露再び戰ふか 價一〇 送三
永井三郎著 現代軍部論 特二〇 送三
矢野恒太著 人生學第一課 價一〇 送三
鵜澤二郎著 ソ支共同抗日戰 價一〇 送三
天沖鄕廟著 日ソの危機を探る 價一〇 送三
野村重太郎著 新官僚の陣容を語る 價一〇 送三
松下芳男著 宇垣一成と南次郎 價一〇 送三
三島康夫著 赤軍の全貌 特二〇 送三
永松淺造著 池田成彬傳 特一〇 送三
多賀壯一郎著 貴族院改革問題 價一〇 送三
牧野元次郎著 食ひはぐれなき人生 價一〇 送三

◇今日の問題パンフレット◇

池上五郎著 實說二・二六事變 價一〇 送三
小林順一郎著 新經濟國策の提唱 價一〇 送三
黑川修造著 惑星久原房之助 價一〇 送三
菅原節雄著 陸軍の巨頭を語る 價一〇 送三
片山哲著 無產黨は何を求むるか 價一〇 送三
小林一三著 產業は國營にすべきか 價一〇 送三
神田孝一著 軍部の國策全貌 價一〇 送三
多賀壯一郎著 英雄に何を學ぶか 價一〇 送三
布利秋著 歐洲の不安とスペインの動亂 價一〇 送三
野村重太郎著 寺內壽一と肅軍の動向 價一〇 送三
木村青著 スペインの革命を語る 價一〇 送三
藤澤齋二郎著 支那怖るべし 價一〇 送三
原菅節雄著 傑將・眞崎甚三郎 價一〇 送三
多賀逸郎著 增稅は脅威か福音か 價一〇 送三
中野正剛著 支那をどうする 價一〇 送三
伊達圭介著 日本に何が迫るか 價一〇 送三

山崎靖純著 排日の支那を視る 價一〇 送三
伊達圭介著 軍部と行政機構改革問題 價一〇 送三
永井了吉著 政黨亡國論 價一〇 送三
三島康夫著 日獨はなぜ同盟したか 價一〇 送三
齊藤直幹著 軍部の產業政策 價一〇 送三
長谷川了著 世界に於ける赤露の暗躍 價一〇 送三
中村常三著 支那はどうなる 價一〇 送三
神田孝一著 軍部イデオロギーの新展開 價一〇 送三
野田豐著 惡性インフレに備へよ 價一〇 送三
石龍子著 觀相人物評論 價一〇 送三
菅原節雄著 杉山元と小磯國昭 價一〇 送三
田膠貞次著 日本のインフレーション 價一〇 送三
新井肅人著 馬場財政から結城財政へ 價一〇 送三
菅原節雄著 板垣征四郎と石原莞爾 價一〇 送三
井輪英武著 仕事に有りつく法 價一〇 送三
浦山貫一著 失はれた政權（政治小說） 價一〇 送三

○既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄賣店へ。御送金は振替又は郵便切手のこと。月報『今日の問題』『新刊通知』『直接購讀規定』御入用の方は御申出下さい。
◎本社發行の總目錄御入用の方はハガキで御申込み下さい。

◇今日の問題社パンフレット◇

菅原節雄著	政局の轉換と新勢力の擡頭	價一〇 送三
小汀利得著	我が經濟の動きと株式界の前途	價一〇 送三
大平進一著	支那に於ける列國の爭覇戰	價一〇 送三
首相官邸記者	政變の切迫と次期政權を語る	價一〇 送三
陸海軍記者	最近の軍部を語る座談會	價一〇 送三
伏見武夫著	林の沒落と近衛內閣の成立	價一〇 送三

◇今日の問題・パンフレット直接購讀規定◇

一、今日の問題パンフレットは時局に急速に對應して問題と事件の眞相を正確に解說報導して讀者に正しい時局認識を與へんとするものであります。

二、毎月三册以上發行しますが、發行日は一定して居りません。

三、全國の驛賣店書店で發賣して居りますが、賣店に御不便の方又は發行の都度購讀を希望せらるゝ方のために直接購讀會を組織して本社直接の御申込みを受けます。普通會員と特別會員とがあります。

四、普通會員には毎月三册以上、一ヶ年四十册を配本し　會費は一ヶ月三十五錢、半ヶ年二圓、一ヶ年三圓五十錢であります。

五、特別會員には一ヶ年五十册以上配本し、更に月刊雜誌『今日の問題』を送本致します。會費は一ヶ年六圓であります。

六、會員には毎月一回、本社機關紙を無代送呈します。

七、會費拂込は振替、爲替、集金郵便等御便宜の方法で結構であります。

八、一册づゝの御註文は定價に送料を添へて切手代用で本社へ御申込下さい。

九、十名以上會員を募つて御申込の場合は本社の支部として特に御便宜があります。支部規定は別にありますから御申出下さい。

◇今日の問題社・特別出版◇

本社出版の單行本は、他社のものと比較して內容、賣數から見て殆ん最低價の特價にて全國の書店にて發賣しておりますが、品切の節は直接本社へ御便宜の方法で御注文下さい。

野田經濟研究所長 野田豐著	軍部と財界	讀戰時下に於ける日本軍部の動向と財界の諸問題を解說したもの。	特價八十錢 送料六錢
海軍少佐 齋藤直幹著	戰爭經濟讀本	大軍擴時代に於ける日本經濟は如何に統制されて行くか。戰爭經濟とは何か。	特價八十錢 送料六錢
野村重太郎 他三名共著	軍部と轉換期の政治	軍部に關するの既刊パンフレットを合して一册にしたもの。	特價六十錢 送料六錢
戸坂潤著	現代日本の思想對立	日本に於ける思想は如何なる動向をたどるか。ファッショか、共産主義か？	特價六十錢 送料六錢
齋藤二郎著	支那をめぐる日ソ英米	最高機關の機關を動員し最新の調査による情報書	特價五十錢 送料四錢
牧野元次郎 他三名共著	人間を作れ・金を作れ	本社に於て既に發行したパンフレットのうち處世修養に關するもの六を合して一册としたもの。	特價六十錢 送料六錢

鈴木茂三郎著 **日本財閥の解剖**
日本の大小財閥の組織内容、系統、人物を圖べ上げた新研究の書
特價五十錢 送料六錢

三島康夫著 **赤軍の新研究**
赤軍に對する最近の調査研究の書として專門家、識人必讀の書
特價八十錢 送料九錢

熊崎健翁著 **姓名判斷と改名法**
どうしたら姓名で運勢が分るか。どうしたら良名に改名出來るか。
特價三十錢 送料六錢

不動貯金銀行頭取 牧野元次郎著 **私の處世法**
一代で日本一の大貯蓄銀行を造り上げた故牧野氏の興味深い處生學。
特價八十錢 送料九錢

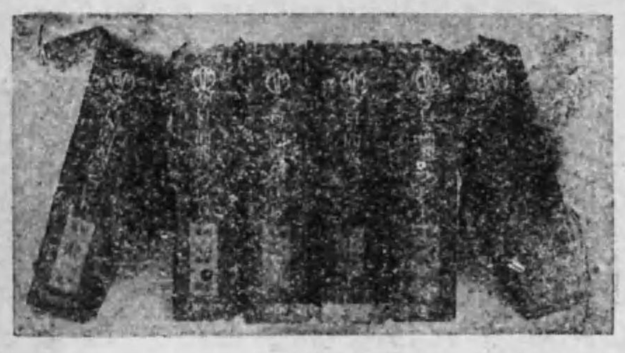
近刊豫告

野田豐著 **戰爭と財産**
四六判三百頁 上質紙・上製 定價壹圓 送料十二錢

陸軍大佐 小林順一郎著 **日本主義政治の原理**
四六判二百五十頁 上質紙・並製 特價八十錢 送料九錢

菅原節雄著 **軍部の中心人物**
四六判二百五十頁 上質紙・並製 特價八十錢 送料九錢

パンフレット保存用 綴込カバー（十五冊綴込）



總クロース・金文字入 綴込用紐付・美麗 **定價金三十錢**（送料不要）

パンフレット愛讀者各位の御希望によつて、本社で綴込み表紙カバーを創案しました。

一組十五冊綴込みにて、上等クロースを用ひた堅牢なもので體裁頗るよく、順次發行のパンフレットを綴込んで保存して置くのに便利であり、書架に納めても立派な裝飾となり、時局エイサイクロペーディアともなつて、各方面より大好評を受けて居ります。

希望者には實費にて頒布しますから前金で本社へ。

發賣元 東京市芝區田村町四の十八 振替東京五九七四八番 **今日の問題社**

＝愛讀者サーヴイス＝

本社の機關新聞
『今日の問題普通號』を
何方にも無代進呈す！

希望者はハガキで本社へ直接御申込み下さい。

毎月一日發行の四六四倍六頁新聞型の機關紙は、一名豆新聞の異名を以て呼ばれるものです。いろ〳〵な面白い記事あり讀者欄あり、新刊紹介あり、各方面より申込殺倒しつゝあります。今すぐ御申込あれ、毎月無代進呈！

375
304

りん病には三方療法が最もいい

りん病を一方から治さうとしても其れは無理である。例へば、内服藥は内服ばかりしたり注入藥は注入ばかりして治さうとしたつて六〇六號でも、そう効め薄くなつた梅毒の今日此の頃、復雜な淋菌を持つ淋病がどうしてそう簡單に治し了はせるものではない。ここに於て藥劑士界の先人、小川友三先生が貴重なる自己體驗からして苦心研究の結果「りん病三方療法」を發明創製。

1、内服藥に依つて人體深く潜伏せる淋菌に强烈なる殺菌作用を行ひ。

2、尿道藥に依り外部から局部的に殺菌し尚、其の上。

3、濕布に依つて反應熱を起さしめ。

期く三方から一擧に治療せば、急性淋病はもとより如何な惡性の淋病でも全く其の目的は達成され得るのは百萬の言を費やすより明かな事であつて、敢へて「三方療法」を薦むる由以である。姑息なる單一療法を止め今直ぐ日本藥學研究所へ御申込を乞ふ

特製	一週間分 八圓	二週間分 十五圓	三週間分 二十圓
別製	同上 六圓	同上 十一圓	同上 十五圓

特製は急性用、別製は慢性用です。夫婦用は一割引

發賣元 日本藥學研究所
東京市・芝公園九號地
振替東京五八四八九番
電話芝(43)三二四四番
製劑所 三方療法研究所
(代理店募集)
責任藥劑士 小川友三先生

時局雜誌

今日の問題

七月號

特輯・臨時增刊號

六月十五日全國一齊發賣

▼近衛內閣成立の經緯……赤木貞一郎
▼林內閣沒落の實相……野村重太郎
▼近衛內閣に豫想さるゝ運命…矢部周
▼海軍の中心人物を語る……古澤磯次郎
▼日本新興五財閥の全貌……岩井良太郎
▼金の現送と爲替の問題……野田豊
▼日本ファシズムの展望……伊達圭介
▼スペインは其後どうなつてゐるか板倉進

情報と解說と評論・生きた雜誌！

即刻讀め！ 全國驛賣店、各書店にあり

毎月一回十五日發行定價十三錢（送料一錢）
半ヶ年 六冊 七十八錢（送料共）
一ヶ年 十二冊 一圓五十六錢（送料共）

東京市芝區田村町四の一八
振替東京五九七四八番 今日の問題社

終